

<発表要旨>

Heritage の形成－シンガポールの南音に見る人と音の移動が紡ぐ文化遺産としてのパブリック・メモリー

伏木香織

南音は 2009 年、UNESCO の無形文化遺産に登録された中国福建省泉州に由来するとされる音楽芸能である。一般には、唐時代の音楽を受け継ぐものとして紹介され、楽器の音色、琵琶の演奏法、歌詞の発音などに古型を残すとされる。この音楽は、人々の移動に伴い、広く東南アジア一帯でも演じられるが、その中でもインドネシア、シンガポール、マレーシア、フィリピン、台湾などではそれぞれに愛好団体が結成され、さかんに上演されてきた。

本発表はその中で、独自の展開を見せたシンガポールの事例を取り上げ、シンガポールにおいて南音が再形成されていく様子を、Heritage という概念を通じた人々の記憶の集積、再構成として見つめるものである。

シンガポールに南音がもたらされたのは 19 世紀の末、当初は移民たちの同郷コミュニティの中で同好会として始まったものであった。故地にあつては庶民が演奏できないという演奏習慣があつたにもかかわらず、異郷において、同郷コミュニティの愛好者すべてに演奏の機会が開かれていた点で、すでに福建省における南音のあり方とは異なるものであった。しかしその後、音楽社(同好組織)が結成されるようになると、シンガポールという都市の中で、南音はさらに独自の展開を見せるようになっていった。単なる同郷組織の同好会という意識を超え、音楽社は常に、人と世界ともの動きに敏感であった。第二次大戦や中国文化大革命の時には、故地で文化が破壊される危機を受けて、多く音楽社が直接的資金援助活動を行ったり、混乱する中国福建省から、楽器や楽譜を持ち出したりして、南音を積極的に維持、継承しようとした。そのため文革の 10 年で破壊しつくされたと言われた南音は、文革終了後直ちに、各地音楽社からの協力で、急速に回復を見せていく。

その際、大きな役割を果たしたのが、シンガポール最古の南音音楽社である湘霊音楽社であった。文革の嵐が吹き荒れる間も経済発展を続けたシンガポールで、湘霊音楽社の社長丁馬成は南音世界大会を企画、南音の姿を大きく変えたのである。小品の創作、歌詞内容の改良、演奏習慣の改変、新しい梨園戯の創作、演出などが行われ、これらは積極的に台湾、中国、フィリピンなどの音楽社に伝えられた。この改変、創作はシンガポールという都市独自の経験の中で、独自の発想のもとに行われたのであった。彼の死後も、こうした改革は続けられたが、復興を支援した泉州と近年になって新たな形で密接な関係を持つようになって、シンガポールではその実践が中国とシンガポールでは異なっていることに気がつくようになった。ここから南音とその実践をシンガポールの Heritage として再構成する試みが、さらに推進されるようになったのである。その目指すものとはなにか、人々の記憶の集積はどのような形で提出されようとしているのか。

本発表は、2013 年 9 月までのシンガポールにおけるフィールドワークに基づく。継続中の調査であるため、明確な形での結論は出せないが、シンガポール政府が 2013 年 7 月に Heritage を政治化したことと関連付けて、これまで脱政治化を目指して使われてきた Heritage という言葉が変質し、シンガポールにおける文化現象、文化表象、パブリック・メモリーの政府主導による Heritage 化という新たな現象が起きていることについても考察を加えたい。